

二つの形代物語

——形容表現から見た源氏物語の人物描写——

橋 本 美 香

第一章 源氏物語の人物描写

源氏物語の人物論というと、物語の主題や構造、展開に関わるものが大半であるが、本稿では本文の描写に基づいて、その人物の描き方を見てみようと思う。本文にそって人物の描写を追っていくと、その大半が形容詞・形容動詞・動詞でなされていることに気付く。したがって、本稿ではこれらを総括して形容表現と呼ぶこととし、この形容表現に注目しながら源氏物語の人物描写について考えていきたい。なお、用例はすべて『新編日本古典文学全集』（小学館）により、用例の所在を（巻名 冊数—頁）で示すこととする。

源氏物語の人物描写の特徴は形容詞・形容動詞などによる形容表現の使い方にあると思うのだが、それをよく表しているのが六条御

息所と明石の君の例である。

明石の君は光源氏とはじめて言葉を交わしたとき、「ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。（明石 二―二五七）」と語られた人物である。それをふまえて明石の君と六条御息所の形容表現を見比べてみると、他人とは思えないほどの一致が見られる。

1 うちとけぬ御ありさまなどの気色ことなるに、

（夕顔 一―一四二）

2 心にくくよしある聞こえありて、

（葵 二―五三）

3 母御息所いと重々しく心深きさまにものしはべりしを、

（濡標 二―三二〇）

4 心ばせのいと恥づかしく、よしありておはするものを、

（葵 二―二六）

5 さまことに心深くなまめかしき例にはまづ思ひ出でられる
ど、人見えにくく、苦しかりしさまになむありし。

(若菜下 四—二〇九)

6 うちとけぬ気色下に籠りて、そこはかとなく恥づかしきところこそあれ

(若菜下 四—二一〇)

7 ことさら卑下したれど、けはひ、思ひなしも心にいく毎らは
しからず。

(若菜下 四—一九三)

8 心深く思ひあがりたる気色も、

(明石 二—二五〇)

9 もてなしなど気色ばみ恥づかしく、心の底ゆかしきさまして、
そこはかとなくあてになまめかしく見ゆ。

(若菜下 四—一九三)

10 几帳にはた隠れたるかたはら目、いみじうなまめいてよしあ
り、たをやぎたるけはひ、皇女たちと言はむにも足りぬべし。

(松風 二—四一六)

1 から5は六条御息所、6から10は明石の君の描写である。近寄
りがたい様子、気の抜けない様子を表す「うちとけず」(1・6)、
奥ゆかしい様子を表す「心にくし」(2・7)、思慮深いさまを表す
「心深し」(3・8)、優雅でしっとりとした美しさを表す「なまめ
かし」(5・9)、こちらが恥じ入りたくなるような気品を感じさせ
る「恥づかし」(4・6・9)、たしなみ深い様子を表す「よしあり」

(2・4・10)といった形容が一致していることがわかる。つまり、
六条御息所と明石の君はどちらも近寄りがたくて思慮深く、こちら
が恥ずかしくなるような気品のある人物として描写されている。

ところで、別表のように形容表現を集計してみたところ、六条御
息所を特徴づける形容表現は、「うちとけず」「心にくし」「心深し」
「恥づかし」「よし」であることがわかる。一方、明石の君の形容
表現の中で数の多いものは、「うちとけず」「思ひあがる」「気高し」
「恥づかし」「めざまし」「めやすし」などであるが、彼女の人柄を
特徴づけるものとしては、他に「あてなり」「心にくし」「なつかし」
「なまめかし」などがあり、ここからも六条御息所とは「うちとけ
ず」「心にくし」「恥づかし」が一致することがわかる(別表一)
参照)。そして、六条御息所の形容表現十九種のうち十種が明石の
君と一致することからも、そこに両者を同じ性質を持つ人物として
描写しようという作者の意図があったと考えることはできないだろ
うか。また、光源氏が明石で出会った心惹かれる女性として描くた
めに、明石の君をただの田舎娘としてではなく、藤壺の宮にも共通
する「気高し」「心深し」「恥づかし」「深し」などの形容を用い
(別表二)参照)、また六条御息所にはなく藤壺の宮にある、「あ
はれなり」「なつかし」といった形容を加えた人物として造形した
のではないかとも思われる。

このように、源氏物語では同じ形容表現を用いることで似ているという記述を裏付けるという人物描写がなされているのである。では、似ていることが前提とされる形代という役割を持つ人物はどのように描写されているのだろうか。

第二章 形代の描写

一 源氏物語における形代について

源氏物語における形代とは、理想とする女性を得られないとき、その身代わりとして登場する人物である。桐壺更衣に対する藤壺の宮、藤壺の宮に対する紫の上、宇治の大君に対する浮舟などが代表的である。鈴木一雄氏によると、「ゆかりとは『永遠の女性』¹¹ 思慕をなくさめる『形代』、『身代わり』の女性」であり、形代とゆかりは同一のものとして考えてもよいようである。

源氏物語はゆかり、つまり形代を追ひ求める物語とも言える。光源氏は藤壺の宮への満たされない思いを胸に、さまざまな女性と関係を持つ。また、薫は結局手に入れることができなかった大君の代わりに、妹の中の君にその面影を求め、さらに大君に似ているという浮舟を身代わりにしようとする。

形代であるためには、絶対条件として容貌が似ていなければならぬ。ということとは、必ず「似ている」という描写があるはずであ

る。以下、第一部・第二部における形代である紫の上、宇治十帖における形代である浮舟について、それぞれの描写を見ていきたい。なお、ここではこの「形代」を、単に容貌の似ているものとしてではなく、本体の身代わりとできるもの、つまり本体のすべてを受け継ぐものとして考えたい。

二 藤壺の宮と紫の上の場合

紫の上をはじめて目にした光源氏が、「限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、（若紫——二〇七）」¹² と思うことから、紫の上は藤壺の宮によく似ていることがわかる。それをふまえて以下両者の描写を比較していきたい。

11 ありがたき御容貌人になんと奏しけるに、（桐壺 一—四二）
12 来し方行く末ありがたくもものしたまひけるかな、

（野分 三—二六九）

11は藤壺の宮、12は紫の上の描写であるが、これはどちらも器量めつたにないほどにすぐれているという意味で用いられている「ありがたし」である。

13 これに、足らず、また、さし過ぎたることなくものしたまひけるかなとありがたきに、いとど胸ふたがる。

（帚木 一—九〇）

14 至らぬことなく、すべて何ごとにつけても、もどかしくたと
たどしきことまじらず、ありがたき人の御ありさまなれば、

(若菜下 四—二〇五)

13 は雨夜の品定めをふまえて、藤壺の宮が足らぬことも行き過ぎ
たこともなく類ない女性であることを言い、14 は紫の上が万事にわ
たり不安なところがなく類ない有様であることを言う。前述の器量
がすぐれているという意味ではなく、人柄が類ないほどすぐれ
ているという意味でも共に「ありがたし」が用いられている点に注
目したい。

15 うちなやみ面瘦せたまへる、はた、げに似るものなくめでた
し。

(若紫 一—二三四)

16 こよなう瘦せ細りたまへれど、かくてこそ、あてになまめか
しきことの限りなさもまさりてめでたかりけれと、

(御法 四—五〇四)

15 は藤壺の宮が懐妊のため面やつれしているさまが無類の美しさ
であることを言い、16 は紫の上が病のためにやつれてはいるが、か
えて気高く優艶な感じがまさって美しいことを言う。少し状況は
違うが、当時ふつくらしとしていたことが美しいとされていたにもか
かわらず、やつれていても、あるいはやつれているがゆえにかえつ
て美しさがまさと語られる、稀有な美質の持ち主であるという点

で一致する。

17 藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうなる
人をこそ見め、似る人もなくおはしけるかな、

(桐壺 一—四九)

18 なほこくら見る中にたぐひなかりけりと、思し知らるる人の
御ありさまなり。

(須磨 二—一七三)

19 さらに、こくら見れど、御ありさまに似たる人はなかりけり。

(若菜下 四—二二一)

17 は光源氏が藤壺の宮を最高の女性とする気持ちである。18 は光
源氏がこれまで逢った女性たちの中で紫の上は類のない人なのだと
納得する場面であり、19 は光源氏が多くの女性を見てきた中で紫の
上のようにすぐれている人はいないと言う場面である。どちらもこ
の上なくすぐれた女性であることを「似る人なし」「たぐひなし」
という形容で表している。なお、「似る人なし」「たぐひなし」とい
った、他に例がないほどすばらしいという形容がされているのは、
光源氏に関わりを持った多くの女性の中でも、藤壺の宮と紫の上だ
けであることも参考までに記しておきたい。

20 いと若く盛りにおはしますさまを、

(薄雲 二—四四四)

21 めでたき盛りに見えたまふ。

(若菜上 四—八九)

20 は藤壺の宮が三十七歳のときで、21 は紫の上が三十二歳のとき

である。普通なら容貌も衰えてくるころであらうが、三十歳を過ぎてなお、「盛り」の美しさといわれる美質が一致している。

22 いと心憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず心深う恥づかしげなる御もてなしなどのなほ人に似させたまはぬを、(若紫 一一二三)

23 うらもなくなつかしきものからうちとけてはたあらぬ御用意など、いと恥づかしげにをかし。(若菜上 四一七〇)

22は藤壺がやさしくかわいらしくありながら、うちとけずつつしみ深く、こちらが氣詰まりなほどの物腰であることが格別だと言い、23は紫の上が恨みもせずやさしくしているが、うちとけてしまうのでもない心づかいが、こちらが恥じ入りたいほどであることがすばらしいと言う。「なつかし」くありながら「うちとけず」「恥づかしげ」であるという、一見両極端な性質が見事に調和していて好ましい様子が一致している。

24 のどかにながめ入りたまへる、いみじうらうたげなり。

(賢木 二一〇九)

25 ありつる花の露にぬれたる心地して添ひ臥したまへるさま、うつくしうらうたげなり。愛敬こぼるるやうにて、

(紅葉賀 一一三三一)

24と25はそれぞればんやりとしている様子がいたわしくかわいら

しいことを言う。藤壺の宮はどちらかと言えはいたわしく思う気持ち強く、紫の上のほうは「愛敬」がこぼれるようなかわいらしさがあるという点で少しニュアンスは違うが、物思いにふける様子が「らうたげなり」と描写されていることに注目したい。

26 さまことにいみじうねびまさりたまひにけるかなとたくひなくおぼえたまふに、(賢木 二一一〇)

27 女君は二十七八にはなりたまひぬらんかし、盛りにきよらにねびまさりたまへり。(玉鬘 三一一九)

「ねびまさる」とは加齢とともに美しさが増すことを言う。26は藤壺の宮が二十九歳のときで、27は紫の上が二十七・八歳のときである。どちらも女盛りに美しく成長していることが一致する。

以上見てきた形容表現のほか、「別表二」によると、藤壺の宮と紫の上は「飽かぬことなし」「あたらし」「あはれなり」「言ふかひあり」「うつくしげなり」「気高し」「すぐる」「なまめかし」「にはひ」「めでたし」「よし」「若し」「をかし」などが一致する。さらに、「別表二」にまとめたとおり、藤壺の宮の形容表現は全部で三十四種あるが、そのうちの二十二種、半数以上が紫の上と一致することに注意したい。もちろん紫の上には藤壺の宮にはない「愛敬」「おいらかなり」「かどかどし」「らうらうじ」などの形容がなされてお³り、また適度な嫉妬心もあり、そのために光源氏の心を強くとらえ

ることができた。しかし、これらは藤壺の宮の形容表現の半数以上を受け継いだ上で紫の上が独自に持った美質であるので、紫の上は藤壺の宮の形代として十分にその役割を果たしながらも、独自の魅力を発揮していったと考えるのに不都合はないと思われる。

三 大君・中の君・浮舟の場合

浮舟は「あやしきまで昔人の御けはひに通ひたりしかば、（宿木 五―四五〇）」不思議なくらい大君の様子に似ていることや、「ただそれと思ひ出でたるに、（宿木 五―四九三）」そっくりであると大君を思い出さずにはいられない、また、「対の御方にいとおぼえたり。（浮舟 六―一二〇）」中の君に非常によく似ているなど繰り返し語られることから、大君や中の君に似ていることがわかる。一方、中の君が大君に似ていると語られるのは大君の死後であり、最初から形代として登場した浮舟とは少し事情が違うようである。宇治十帖の始めのほうでは、大君と中の君はしばしば対比して描写されている。薫が初めて大君と中の君を見たとき、中の君を見て、「いみじくらうたげににはひやかなるべし。（橋姫 五―一三九）」と思い、大君のほうは「いますこし重りかによしづきたり。（橋姫 五―一四〇）」と思う。また、八の宮の死後二人の容貌をはっきりと見た薫は、中の君を「かたはらめなど、あなうたげと見えて、

にはひやかにやはらかにおほどきたるけはひ、（椎本 五―二一七）」と見、大君を「うしろめたげにゐざり入りたまふほど、気高う心にくきはひそひて見ゆ。黒き袷一襲、これはなつかしうなまめきて、あはれげに心苦しうおぼゆ。（椎本 五―二一八）」と見ている。中の君は「らうたげ」で「にはひやか」であり、「やはらか」に「おほどきたる」気配であるのに対し、大君は「重りか」に「よしづき」、「気高う心にくき」気配であり、「なつかしうなまめきて」と描写されている。このように、二人が対比されて描かれる場面において形容表現の一致は見られない。つまり、大君と中の君はそれぞれ違った性質を持っていると言える。

ところが大君の死後、中の君を前にした薫は、いと盛りににはひ多くおはする人の、さまざまの御もの思ひにすこしうち面瘦せたまへる、いとあてになまめかしき気色まさりて、昔人にもおぼえたまへり。並びたまへりしをりは、とりどりにて、さらに似たまへりとも見えざりしを、うち忘れては、ふとそれかとおぼゆるまで通ひたまへるを、

と感じ、初めて中の君は大君に似ていると思う。その他にも、声なども、わざと似たまへりともおぼえざりしかど、あやしきまでただそれとのみおぼゆるに、（宿木 五―一三九三）

いと忍びて言もつづかず、つつましげに言ひ消ちたまへるほど、
なほいとよく似たまへるものかなと思ふにも、

(宿木 五一三九五)

といったように、何度か中の君が大君に似ていることが語られる。
しかし、「並びたまへりしをりは、とりどりにて、さらに似たまへ
りとも見えざりしを」、「わざと似たまへりともおぼえざりしかど、」
とあるように、大君の生前は二人が似ているとは思わなかったとは
つきり書かれており、やはり大君と中の君は本来似ていなかったこ
とが確認できる。それでも薫は「ふとそれかとおぼゆるまで通ひた
まへるを」、「あやしきまでただそれとのみおぼゆるに」、「なほいと
よく似たまへるものかな」と、ふと大君ではないかと思つてしまふ
ほど、二人が似ていると感じている。薫がそう感じることに、はた
して根拠はあるのか。また、大君にも中の君にも似ていると言われ
る浮舟は、どのように描写されているのか。以下、まずは三人につ
いての描写を見ていきたい。

28 めづらしく女君のいとうつくしげなる生まれたまへり。

(橋姫 五一一一八)

29 うつくしげなるにはひまさりたまへり。(総角 五一二四二)
30 いと若ううつくしげなる女の、白き綾の衣一襲、紅の袴ぞ着
たる、香はいみじうかうばしくて、あてなるけはひ限りなし。

28は大君が生まれた時の様子であり、29は中の君が二十四歳の時
のことであり、30は浮舟が失踪した後、僧たちに発見された時の様
子で二十二歳のことである。年齢的に違いはあるが、いずれも「う
つくしげ」な容貌をしており、かわいらしいことを言う。

31 例のいとつつましげにて、(橋姫 五一四八)

32 ひとつつましげにのたまふが、(宿木 五一四二五)

33 だいたひとつつましげにて、ひたみに恥ぢたるを、さうさう
しと思す。(東屋 六一九九)

31 32 33では、いずれも遠慮がちな様子が「つつましげなり」と形
容されている。ただし、31の大君、32の中の君は控え目な態度が薫
の目に好ましいものとしてとらえられるが、33の浮舟の場合は、遠
慮がちにひたすらはにかんでいる様子が、はりあひなく思われてい
る点に注意が必要である。同じ「つつましげ」な様子であっても、
大君・中の君と浮舟では、薫の受けた印象に違いがある。

34 すこしうち嘆いたまへる気色浅からずあはれなり。

(橋姫 五一四八)

35 ありがたくあはれなりける、(蜻蛉 六一二七〇)

36 いとあはれなる人の容貌かな、(東屋 六一七三)

34は大君が嘆いている様子が胸に迫るものがある様子を言い、35

は中の君の様子が世にもまれであると胸を打たれるさまを言い、36は浮舟の容貌がしみじみとなつかしく胸にしみることを言う。この「あはれなり」も、大君と中の君の場合は様子・人柄についての形容であるのに対し、浮舟の場合は顔・姿についてという、外見的な要素にとどまっている点に注意したい。

37 あはれげに心苦しうおぼゆ。 (椎本 五一二一八)

38 いと心苦しうあはれなれば、 (宿木 五一四四六)

39 心ばへ、容貌を見れば、え思ひはなつまじう、らうたく心苦しきに、 (東屋 六一七〇)

37は大君がしみじみと胸に迫る様子であることをいたわしく思う場面であり、38は中の君がいたわしくせつなく思われる様子を言い、39は浮舟の気だてや顔立ちが、捨て置くことはできないほどかわいくもいたわしくもあることを言う。参考までに言えば、源氏物語の主な女性の中で、この「心苦し」という形容詞が用いられるのは、この宇治の三姉妹だけである。

40 うちとくべくもあらぬものから、なつかしげに愛敬づきてもものたまへるさまの、 (総角 五一三三二)

41 なつかしく愛敬づきたる方はこれに並ぶ人はあらじかしとは思ひながら、 (宿木 五一四〇八)

42 そのことぞとおぼゆる限なく、愛敬づき、なつかしくをかし

げなり。 (浮舟 六一三二)

40は大君が気を許すわけではないが、やさしく情味のある人柄であることを言い、41は中の君のやさしく情味のあるところは、並ぶ人のないことを言い、42は浮舟がやさしく情味をたたえていて、人なつくかわい風情であることを言う。同じ「なつかしく」「愛敬」ある人柄であっても、中の君と浮舟が単に「愛敬」づき「なつかし」であるのに対し、大君の場合はうちとけない様子というのではないが「なつかし」とある。つまり、大君は中の君と浮舟にはない、「うちとけず」的な雰囲気を感じさせる女性であるという点に注意しなければならない。

43 面うち赤めておはするさま、いとをかしげなり。

44 いみじくをかしげに盛りと見えて、 (総角 五一二七四)

45 いとらうたげにをかしげにゐたまへるに、 (総角 五一二七九)

43 面うち赤めておはするさま、いとをかしげなり。 (東屋 六一三四)

44 いみじくをかしげに盛りと見えて、 (総角 五一二七九)

45 いとらうたげにをかしげにゐたまへるに、 (総角 五一二七九)

46 恨むべうもあらず、なつかしうらうたげなる御もてなしを、 (総角 五一三二五)

47 いまずこしうつくしくらうたげなるけしきはまさりてやとお

ぼゆ。 (総角 五一二五三)

46は大君の様子が恨みようもない、いかにもやさしく可憐であるさまを言い、47は中の君は大君に比べて、愛らしく可憐な様子がまさっているように思えると言い、前に挙げた例になるが、45は浮舟の様子が愛らしく美しいことを言う。

48 いよいよあはれげにあたらしく、をかしき御ありさまのみ見ゆ。
(総角 五—三二六)

49 あたらしくをかしきさまを、
(総角 五—三〇一)

50 少将などいふほどの人に見せんも惜しくあたらしきさまを、
(東屋 六—三二)

48は臨終に際して大君の容姿がもつたいないほど美しいことを言い、49は中の君がもつたいないくらいに美しいことを言い、50は浮舟が少将と結婚するのは惜しくもつたいないくらい美しいことを言う。同じ「あたらし」でも、大君と中の君は彼女たち自身が「あたらし」いのであるが、浮舟の場合は少将ふぜいと結婚させるには「あたらし」とあり、少し意味合いが違う。

51 限りなくあてに気高きものから、なつかしうなよかに、
(東屋 六—七三)

52 らうたげにあてなる方の劣りきこゆまじきぞかしなど、

(総角 五—三〇三)

53 け劣るとも見えず、あてにをかし。
(東屋 六—七一)

51は大君の人柄がどこまでも上品で気高いものの、やさしくやわらかであったことを言い、52は中の君がいじらしく気品高いことでは他の女性にひけをとらないことを言い、53は浮舟の様子が中の君に劣らず上品で美しいことを言う。

大君・中の君・浮舟には以上に挙げた他にも、「別表三」により「いとほし」「うつくし」「惜し」「児めく」「こよなし」「なまめかし」「ねびまさる」「細やかなり」「らうたし」「をかし」といった形容が一致していることがわかる。しかし、ここで注意しなければならぬのは、これらの形容表現の使われ方である。前に述べたように、紫の上の場合は、同じ形容が藤壺の宮と同じ状況で使われていることが多かった。さらに、同時に用いられている形容表現も一致することが多かった。ところがこの宇治の三姉妹の場合は、同じように使われている場合ももちろんあるが、前に挙げたとおり、「なつかし」「らうたげなり」「あてなり」のように、同時に使われている形容表現が違っていたり、「あはれなり」のように外見と内面とというように形容の対象が違うなど、同じ表現が使われていても意味に違いがあったりと、一概に同じ形容がなされているとは言えない状況のものが少なからずある。また、「別表三」にまとめたように、大君の形容表現は全部で五十六種あるが、そのうち、中の君・浮舟にも共通して使われているものは二十種と、半数にも満たない。つ

まり、大君の面影を残す中の君も、大君に瓜二つと語られた浮舟も、大君の性質をそのまま共有しているというよりは、それぞれに独自の形容がなされているほうが多いのである。特に浮舟は大君にある「よしあり」「気高し」「心にくし」「らうらうじ」「重りかなり」「恥づかしげなり」といった形容はなされていない。つまり、浮舟にはこちらが恥づかしくなるような奥ゆかしさや気品、たしなみ深さなどはないのである。それどころか、

おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。

(東屋 六一九六)

あまりにもおつとりとしすぎている点が頼りないといわれ、

はかなしや、軽々しやなど思ひなす人も、(蜻蛉 六一二七五)

なんとも頼りなく軽慮の人と語られている。さらに、「別表三」により浮舟に使われている「おいらかなり」「おほどかなり」「おほどく」を合計すると十例にもなり、大君の一例と比べてもわかるように、浮舟はおつとりとした性質が非常に強い。これらのことから、外見はよく似ているが、内面があまりにも違うので、浮舟は大君の形代として十分な役割を果たしているとはいいがたい。もちろん劣り腹であり田舎育ちの長かった浮舟は、血筋や育ちの面からいっても大君の形代になりきれないといったことも考慮しなければならぬが、形容表現の面から見ても、浮舟は十分に大君の形代としての

役割を果たしていると言うことはできないのである。そのことについては、第三章で詳しく述べることにする。

ところで、なぜ薫は大君とは性質の違う中の君を、大君に似ていると思ったのだろうか。前に述べたように、大君の生存中は薫も二人が似ているとは思わなかった。しかし、大君の死後尽きぬ悲しみを抱えた薫は、中の君を大君の形見と思い、中の君を自分のものにしておけばよかったと後悔する。さらに、「ただ、かの御ゆかりと思ふに、思ひ離れがたきぞかし、(宿木 五―三八八)」大君のゆかりと思うせいであきらめられないのだと思う。そして、匂宮が夕霧の娘と結婚することになり、物思いをするようになった中の君が、思慮深く奥ゆかしい気配を身につけると、薫はそういった中の君の雰囲気の中に、大君の面影を見るようになったのではないだろうか。したがって、形容表現からも見たとおり、やはり大君と中の君は似ているのではなく、本質は「愛敬」つき「らうたし」である中の君が、「恥づかしげ」で「心深」いところも身につけたことにより、薫が大君と中の君を同一視するようになったにすぎないのではないかと思われる。

第三章 形代の描き方の違い

第二章で述べたように、紫の上は藤壺の宮の美質をほとんど受け

継いだ上に独自の魅力を開花させていったので、藤壺の宮の形代としての役割を十分に果たすことができた。しかし、浮舟は大君の内面を受け継いでいないために、完全な大君の形代として十分とは言えない。三田村雅子氏は「形代の関係は、そのような血縁の繋がりと言うよりは、むしろ運命的な容貌の相似にもとづいている。」と述べておられるが、単に容貌が似ているというだけでは、形代として成功することはできないと思う。それは、形代を求めた光源氏・薫の視点からも明らかになる。両者の違いの根拠として以下の用例を挙げたい。

十四歳になった紫の上を見て、光源氏は

灯影の御かたはら目、頭つきなど、ただかの心尽くしきこゆる人に違ふところなくもなりゆくかな、
(葵 二一六八)

心から慕っている藤壺の宮とそっくりになってゆくではないかと思ひ、また、藤壺の宮を目の当たりにすると、

髪ざし、頭つき、御髪のかかりたるさま、限りなきにははしきなど、ただかの対の姫君に違ふところなし。年ごろすこし思ひ忘れたまへりつるを、あさましきまでおぼえたまへるかなと見たまふままに、すこしもの思ひのはるけどころある心地したまふ。
(賢木 二一〇九)

髪の様子や顔の美しさは、紫の上と少しも違ったところはない。驚

くほどによく似ていることよと思う。ここで注意したいのは、紫の上が藤壺の宮に似ているだけではなく、藤壺の宮も紫の上と変わるころはないと語られていることである。また、藤壺の宮の死後、二十四歳になり女盛りの美しさである紫の上を見て、

髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえてめでたければ、
(朝顔 二四九四)

髪の形や面差しが、藤壺の宮の面影かと思わずにはいられないくらい美しく感じている。もはや紫の上と藤壺の宮は同一視されていると言ってもいいほどに、紫の上は形代としての役割を十分に果たしているのである。

紫の上は確かに藤壺の宮と瓜二つであると語られるが、それだけではなく、藤壺の宮の形容表現の半数以上を共有しているという事実、つまり藤壺の宮の外見も内面も受け継いでいるからこそ、こうまで形代として成功を収めることができたのではないだろうか。さらに、藤壺の宮にはない独自の魅力を發揮していた紫の上は、

さまたまなる人のありさまを見集めたまふままに、とりあつめ足らひたることは、まことにたぐひあらじとのみ思ひきこえたまへり。
(若菜下 四二〇五)

人柄もさまざまな女性を多く見てきた中でも、紫の上のように何もかも備わっている女性はまだとありはしないとまで語られるに至る

のである。これはもう藤壺の宮の形代という存在を超えたと考えてもよいのではないだろうか。

それにひきかえ、外見的には大君と瓜二つであると語られた浮舟は、第二章でも述べたように、大君の「心にくし」「重りかなり」「恥づかしげなり」などといった内面を受け継いでいないために、形代として成功することはできなかった。浮舟は薫によって、

やむことなく、ものものしき筋に思ひたまへばこそあらめ、見るに、はた、ことなる咎もはべらずなどして、心やすくらうたしと思ひたまへつる人の、
(蜻蛉 六一二〇)

重々しい筋の者（正妻などの扱い）ではなく、ただ目をかけてやる分には不都合なこともないので、気がねのいらなかわいらしい人と思つていたと語られ、また、

重りかなる方ならで、ただ心やすくらうたき語らひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を。

(蜻蛉 六一二六〇)

重々しい扱いではなく、気がねのいらぬかわいらしい話し相手くらいにするには、本当にかわいらしい人だったと語られる。大君の思慮深さや重々しさ、こちらが恥づかしくなるほどの気品を備えていない浮舟は、結局人形的な意味での形代の域を脱することができず、紫の上のように、内面を伴って大君の完全な形代になりきることはで

きなかったのである。

第四章 形代に求めたもの

ところで、なぜ同じ形代として登場したにもかかわらず、これはどまでに紫の上と浮舟の描かれ方が違うのだろうか。それはもともと光源氏が紫の上に求めたものと、薫が浮舟に求めたものが違うからではないかと思われる。どちらも得られない永遠の女性の代わりを求めたことに変わりはないのだが、その思いに若干のずれがあるように思われてならない。以下にその理由を述べたい。

まず、光源氏は紫の上を見て藤壺の宮に似ていることから、「かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや、（若紫 一一二〇九）」藤壺の宮の身代わりに明け暮れの心の慰めとして見たいと思う。一方薫のほうは、「かの山里のわたりに、わざと寺などではなくとも、昔おぼゆる人形をも作り、絵にも描きとりて、行ひはべらんとなん思ふたまへなりにたる（宿木 五―四四八）」大君がしのばれるような人形を作るなり絵に描くなりして、山里で動行をしようかと言ったところ、それを聞いた中の君が浮舟のことを持ち出したので、「人形の願ひばかりには、などかは山里の本尊にも思ひはべらざらん。（宿木 五―四五二）」大君の像を作る願ひの程度には、浮舟をその本尊として考えてもよいのではと言ふ。つまり、紫の上

を藤壺の宮本人の代わりとしたいと思う光源氏と、浮舟を大君の人の形の代わりになりたいと思う薫とでは、この時点ですでに求めているものが違うのである。

さらに、光源氏は「うち語らひて心のままに教へ生はし立てて見ばやと思す。(若紫 一一二三)」紫の上を思いのままに教へ育てて妻にしたいと思う。それに対して薫は、「ものものしげにてかの宮に迎へ据ゑんも音聞き便なかるべし、(東屋 六一九八)」浮舟程度の身分の女性を、自邸に迎えとるのも世間体が悪いと思い、「山里の慰めと思ひおきてし心あるを、(浮舟 六一〇七)」宇治へ出かけたときの慰安にしようという程度にしか、浮舟のことを思っていない。紫の上を自邸に引き取ってゆくゆくは妻にしようと考える光源氏と、浮舟の身分が低いこともあるが、世間体を気にして浮舟を正式な扱いにしようとは思わない薫では、その思い入れも違う。

これらの例からわかるように、光源氏と薫では形代に求めたものが根本的に違うのである。そのように根本から違うものが同じように描かれるはずはないだろう。すなわち、紫の上が藤壺の宮の形代として十分に役割を果たすことができたのに、浮舟が完全な大君の形代になりきれなかったのは、両者の資質・身分の違いももちろんあるが、考えてみれば当然の結果なのである。

以上に見てきたように、源氏物語では、形代となる女性には本体

の女性と同じ形容表現を使うことで、似ているということを自然と読者に納得させるような人物描写がなされている。また、形代になりきれかなりきれないかという違いも、形容表現によつてはつきりと示されているのである。源氏物語では非常に計算された上でもそれぞれの人物の形容がなされており、簡単な形容表現の一つ一つにも注意してその意味を考えていかなければならないのである。

【注】

(1) 本文中で各人物に用いられている形容表現を、形容表現集計表として「別表一」～「別表三」にまとめた。

(2) 鈴木一雄氏『物語文学を歩く』(有精堂出版 一九八九年三月) また、鈴木氏はゆかりの例として、「紫のゆかり」「夕顔の露のゆかり」「宇治のゆかり」の三例を挙げておられる。

(3) 重松信弘氏は、「源氏物語の女の心情美」(『源氏物語の探究』第五輯 風間書房 一九七四年)において、「紫上の好感を与える心情は、この物語第一であるが、特に可憐な心情美の「愛敬」と「らうたし」とは、比類がないほどすぐれている。」と述べられており、紫の上の特徴として「愛敬」と「らうたし」を挙げておられる。

(4) 「別表三」によると、中の君は「らうたげなり」「をかし」

「心苦し」「あてなり」「あはれなり」が、浮舟は「をかし」「あてなり」「らうたげなり」「らうたし」「あはれなり」「うつくし」が、数字的には突出した表現である。しかしこれらの他にも、中の君には「愛敬」「にはひ」「かどあり」が、浮舟には「うるはし」「幼げなり」「おほどかなり」などが、彼女たちを特徴づける形容表現として挙げられる。参考までに、源氏物語の中で容姿が整っていて美しいという意味で「うるはし」が使われているのは浮舟だけである。

- (5) 池田節子氏は、『源氏物語表現論』（風間書房 二〇〇〇年十二月）の中で、「薫は、浮舟の外形が大君に似ていると思いつつ、浮舟は大君とは別人だと強く意識していて、浮舟の中に大君を感じるということはない。」と述べておられる。
- (6) 大君が生前に自分の代わりに中の君と薫を結婚させようとしたのに、薫は大君への思いからそれを受け入れなかった（総角 五―二五三）。それを薫は悔やんでいる。

- (7) 三田村雅子氏『源氏物語感覚の論理』（有精堂出版 一九九六年三月）

- (8) 鈴木氏も「ゆかり」の女性紫上が、ついに「ゆかり」としての存在を脱していることである。「ゆかり」を超えた女性として描かれるのである。」と述べておられる。（注（2）に

形容表現集計表

*形容表現集計表は、各人物についての容姿・人柄・様子についての形容表現を集計したものである。したがって、今回は髪の様子や筆跡、琴などの音楽についての形容表現は含めていない。

*「愛敬」には「愛敬あり」「愛敬つく」などを含めて教えた。

*「よし」は良いという意味ではなく、趣味・教養の深いことを表す「よし」、「よしあり」「よしづく」などの「よし」である。

〔別表一〕

〈六条御息所〉

あたらし	1	惜し	心とけず	1	ことなり	1	人見えにくし	1
あはれなり	2	重し	心にくし	1	つつまし	1	ゆゑ	1
いとほし	1	気色ばむ	心深し	1	なまめかし	1	よし	5
うちとけず	2	心苦し	心ゆるびなし	1	恥づかし	2		

〈明石の君〉

あてなり	2	思ふやうなり	心の底見え	1	なまめかし	2	めざまし	4
あてはかなり	1	思はし棄つまじ	心ばせあり	1	なまめく	1	めやすし	3
あはれなり	1	きよげなり	心深し	1	ねたげなり	1	ものづつみす	1
あらまほし	2	際なし	ことなり	1	ねびまさる	2	よし	2
いたし	1	けしうはあらず	上衆めかし	1	恥づかし	4	をかし	1
うちとけず	4	気色ばむ	たをやぐ	1	恥づかしげなり	2		2
おいらかなり	1	気高し	つつまし	1	卑下す	1		
おほどかなり	1	心高し	なつかし	2	人めく	1		
思ひあがる	3	心にくし	なべてならず	1	深し	1		

〔別表二〕

〈藤壺の宮〉

あかぬことなし	1	惜し	1	心深し	2	並びなし	1	めでたし	3
あたらし	1	おびる	1	盛り	1	にははしき	1	やはらかなり	1
あはれなり	1	かかやく	1	すぐる	1	似る人もなし	3	よし	1
ありがたし	2	かたじけなし	2	たぐひなし	3	ねびまさる	1	らうたげなり	2
言ふかひあり	1	気高し	1	立ち並ぶ人なし	1	恥づかし	2	若し	2
うちとけず	1	心かしこし	1	なつかし	3	恥づかしげなり	2	をかし	1
うつくしげなり	1	心とけず	1	なまめかし	1	深し	1		

〈紫の上〉

愛敬	5	うちとけず	1	心の癖なし	1	何心なし	4	めでたし	8
飽かず	1	うつくし	10	心やすからず	1	なまめかし	1	めやすし	1
飽かぬところなし	3	うつくしげなり	9	ことなり	3	なまめく	1	ゆかし	1
あたらし	3	おいらかなり	2	こよなし	1	にほひ(にほふ)	8	ゆゑ	2
あてなり	3	幼し	1	盛りなり	3	似る人なし	4	ゆゑよし	1
あはれなり	7	おほどかなり	2	聡し	1	ねびととのふ	2	よし	1
あらまほし	3	思ひやり深し	1	しづまる	1	ねびまさる	3	世になし	1
ありがたし	11	思ふさまなり	2	しづやかなり	1	はかなし	1	らうたげなり	9
至らぬことなし	1	限りなし	1	執念し	1	恥づかしげなり	4	らうたし	13
いとほし	1	かどかどし	2	すぐる	2	はなやかなり	1	らうらうじ	8
いはけなし	3	かをり	1	たぐひなし	7	まめやかなり	1	若し	4
言ふかひあり	1	きよらなり	5	誰か並びたまはむ	1	見どころあり	2	若ぶ	1
言ふかひなし	3	気高し	3	たをやぐ	1	見るかひあり	1	をかし	12
いまめかし	2	心うつくし	1	常に目馴れぬ	1	見るだに飽かず	1	をかしげなり	4
いみじ	1	心にくし	2	なつかし	2	めづらし	2		

形容表現集計表

〔別表三〕

*大君、中の君の（ ）内の数字は、宇治の姫君として二人を区別することなく描写している例である。
*浮舟の「うるはし」は、二例とも容貌が整っていて美しいという意味の「うるはし」である。

〈大君〉

愛敬	1	うつくしげなり	心深し	なまめかし	4	みやびかなり	(1)
あえかなり	2	艶なり	児めかし	なまめく	1	めやすし	3
あたらし	1(1)	おいらかなり	こよなし	なよかなり	1	やむことなし	1
あてなり	5(1)	惜し	さかし	ねびまさる	(1)	よし	4
あはれげなり	3	重々し	静かなり	のどかなり	2	らうたげなり	1(1)
あはれなり	6(3)	重りかなり	たぐひなし	恥づかし	1	らうたし	1
あらまほし	1(3)	限りなし	つしやかなり	恥づかしげなり	3(1)	らうらうじ	1
ありがたし	1	気高し	つつましげなり	ひがひがし	1	をかし	4(3)
いたはし	1	心苦し	つれなし	人憎し	1	をかしげなり	2
いとほし	1	心苦しげなり	情々し	深し	2		
うちとけず	3	心とけず	なつかし	細やかなり	1		
うつくし	(1)	心にくし	なつかしげなり	見どころ多し	1		

〈中の君〉

愛敬	4	いとほし	かどあり	心深し	1	近まさる	1
あたらし	2(1)	いまめかし	きよげなり	ことなり	1	つつましげなり	2
あたらしげなり	1	うちとく	きよらなり	こまやかなり	1	情々し	1
あてなり	5(1)	うつくし	けさやかなり	児めく	1	なつかし	3(1)
あはれなり	5(3)	うつくしげなり	けしうはあらず	こよなし	1	なまめかし	2
あらまほし	1(3)	惜し	気高し	盛なり	4	にはひ	3
ありがたげなり	1	おほどかなり	心苦し	そびやかなり	1	にはひやかなり	2
ありがたし	3	おほどく	心にくし	たぐひなし	1	ねびまさる	1(1)

恥づかしげなり	4 (1)	細やかなり	1	やはらかなり	2	をかしげなり	5
はなやかなり	1	みやびかなり	(1)	ゆゆし	1	らうらうじ	2
深し	1	めでたし	1	らうたげなり	15 (1)	をかし	8 (3)

〈浮舟〉

愛敬	3	幼げなり	2	心苦し	3	なつかし	1	めづらかなり	1
あたらし	3	惜し	2	心強し	1	なまめかし	1	めづらし	2
あてなり	8	おほどかなり	5	心もとなし	1	なまめく	2	めでたし	3
あてやかなり	2	おほどく	3	心やすし	2	にほひ	1	やはらかなり	1
あはれなり	7	おれおれし	1	心弱し	1	似るものなし	1	よし	1
いとほし	1	限りなし	1	こまかなり	3	ねびまざる	1	らうたげなり	8
いとほしげなり	1	かたじけなし	1	児めく	2	はかなげなり	1	らうたし	8
いまめく	1	軽々し	2	こよなし	1	はかなし	1	若し	2
うつくし	6	警戒なり	1	さうざうし	1	細やかなり	2	をかし	18
うつくしげなり	3	きよげなり	1	ささやかなり	1	まめやかなり	1	をかしげなり	6
うひうひしげなり	1	きよらなり	2	さまよし	1	見苦しからず	1		
うるはし	2	けうらなり	1	すぐる	1	見まざる	1		
おいらかなり	2	け近し	1	つつましげなり	2	見るかひあり	1		

(はしもと みか／本学大学院生)